



宗教学宗教学史学専修課程

2021 年進学ガイダンス資料 一覧

1. 『PROSPECTUS』(学修内容の概要・教員紹介など)

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/assets/files/student/prospectus/05.pdf>

2. 卒論タイトル一覧

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/soturou.html>

3. 在学生・卒業生の体験談

①森下佳子さん講演

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/shoukai.html>

②「宗教学科に進学して1年―「宗教学」と「宗教」について見えてきたこと―」3年生による座談会 (①の下にあり)

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/shoukai.html>

③想田和弘さんインタビュー

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/interview/graduates/vol_13/

4. 読書案内 (このファイルの次ページ以降)

※12月2日のオンラインガイダンスでは、進路状況など上記以外の情報も紹介します。どのタイミングで入室しても同じ情報を得られますので、随意にご参加ください。

写真は研究室旅行の訪問先です。



巣ごもり中の宗教学読書案内

駒場キャンパスでのガイダンスの代わりに、宗教学宗教史学専修課程は、外出自粛期間ならではのブックガイドをお届けします。研究室スタッフそれぞれ、入手しやすい文庫・新書を中心に、宗教学への誘いとなる本、レンタルやオンデマンドで視聴できる映画、インターネットで簡単にアクセスできるデータベース、ウェブサイトなどをご紹介します。教員紹介・研究室紹介を兼ねたラインアップです。

宗教学研究室

HP：<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/>

(過去の卒論題目一覧、授業一覧はこちらから)

「宗教学入門」のための文献・データベース

教員：[西村 明](#)

私が宗教学の入門的な講義をおこなうとき、「入門」とは書かずに「入門」と書く。そのココロは、宗教学はたしかに一つの専門分野なのだけど、閉じられた領域に入っていくというイメージよりも、門を抜けるとそこには広い世界が待っていたという感覚の方がしっくりくるからだ（ここでゴータマ・ブッダ（釈迦）の「四門出遊」のエピソードを思い起こす人もいるだろう）。

ということで、部屋に籠もった状況からオンライン越しに門を出てみるための導き手になりそうな情報を挙げてみたい。

・宗教学や宗教情報について

① [『宗教学の名著 30』島蘭進\(ちくま新書、2008年\)](#)

本書については、すでに東京大学出版会のPR誌『UP』の2019年4月号の「アンケート 東大教師が新生にすすめる本」で次のように紹介した。読んだという人もいないかもしれないが、再掲したい。・・・「宗教学はまだ若い。未来の学で、未熟である」という開き直りは、学の領域を越えて古今東西の先賢に学ぶ意欲と真摯さの裏返しだろう。ブックガイドの体裁で、宗教の世界の深さと広がり示している。・・・



② [宗教情報センター \(CIR\) web サイト](#)

新宗教教団の真如苑所属の研究機関が運営するサイトだが、世界の諸宗教や現代の宗教をめぐるトピックをバランスよく取り上げ、それぞれの分野の一線の研究者も寄稿している。いくつかのテーマが2015年以降更新されていないのは、ちょっと残念。

③ [宗教文化教育推進センター\(CERC\) web サイト「教材」のコーナー](#)

こちらは 2011 年にできた宗教文化士制度の資格認定を行う組織のサイト。大学で宗教関連科目 16 単位取得など、受験資格のハードルは低くはないが、グローバル社会のビジネスや交流の上で必要性も高い。受験者向けに提供されているデータベースなどは、むしろこれから宗教学を学ぶ人たちにとっても有益で、面白く学べるコンテンツが提供されている。同センター編の [『解きながら学ぶ日本と世界の宗教文化』\(集広舎、2019 年\)](#) もおすすめ。

④ [国際宗教研究所編『現代宗教』](#)

宗教の現状について知識や情報にとどまらず、専門家の知見を深く学んでみたいという人におすすめ。2001 年から毎年刊行されているが、2014 年度号以降はオンラインで無償提供されている。目下、2021 年度号のゲストエディターとして奮闘中。

・自分の研究との関連で

⑤ [NAGASAKI Archive](#)

私の博士論文は、長崎の原爆慰霊が中心トピックであった。このサイトは、東大情報学環の渡邊英徳先生を中心にまとめられた被爆者の証言を爆心地にマッピングしたデータベース。VR 版もあり、タブレットやスマホに入れて巡見もできる。他に広島や沖縄、東日本大震災、インドネシア・アチェの津波、1964 年の東京五輪の記憶についての同様のデータベースもあり、人文学的な史資料をどのように記録・紹介するかという人文情報学的視点からも興味深い。

日本の地震や津波被害については、国立民族学博物館の [「津波の記憶を刻む文化遺産－寺社・石碑データベース－」](#) もある。

⑥ [世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」](#)

日本の近世・近代の宗教史に大きな影響を及ぼしたキリシタン伝来・潜伏・信徒発見という一連の出来事に関連する宗教施設や地域が、2018 年 7 月に世界文化遺産に登録された。

世界遺産という UNESCO の制度が地域の信仰・文化・社会のあり方にどのような影響を及ぼすかという視点から、このサイトを分析してみるのも面白い。

⑦ [海外神社\(跡地\)に関するデータベース](#)

神奈川大学非文字資料研究センターによる、戦前に日本の海外展開とともに創建された神社とその跡地に関する情報を集成している。関連するオンラインの論文もいくつか参照できるので、より掘り下げて調べたいという人にもおすすめ。

・おまけ

⑧ [科学映像館「芸術・祭り・神事・体育」カテゴリー](#)

日本の戦前期からの様々なジャンルのドキュメンタリー映像を集めたサイト。祭りや神事が「芸術」「体育」と一括りにされることに宗教学徒であれば、あれこれ思索を巡らしたくもなるが、それはさておき、1978 年を最後に今は見ることのできない沖縄・久高島のイザイホーの映像など貴重な動画も多い。見てみると、フィールドに出たくてウズウズしてくる。

⑨ [ダイドーグループ「日本の祭り」](#)

こちらは映像は少ないが、日本各地の祭りを丁寧に紹介しているサイト。英語ページもあるので、日本の文化を紹介する際にどのように表現すべきかの参考にもなる。企業がなぜこのようなサイトを運営しているのか？ 経営人類学という宗教学に所縁の深い視点からとらえる目も養いたい（ヒントは、[ダイドードリンコの歴史を説明したページ](#)を参照。）。

⑩ [NHK ラジオ「音の風景」](#)

生きた信仰世界の理解には、ヴィジュアルばかりではない感覚を研ぎ澄ます必要がある。音から入ってみるトレーニングとして、最適なラジオ番組のサイト。永平寺の四季や各地の祭りの様子に混じって、北九州のミャンマー寺院の祈りの風景なども取り上げられている。

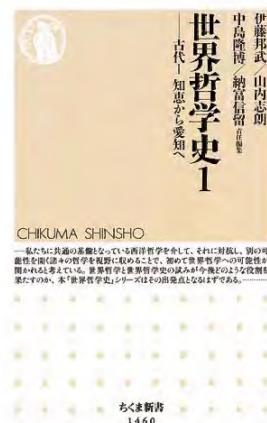
2020 私的読書案内

教員：[渡辺 優](#)

できるだけ手に入りやすいと考えられる書物にかぎり、思いつくままに列挙した。私自身は西洋の宗教思想史（神秘主義思想史）を専門に研究しているが、以下に紹介する本はいずれも、広く宗教学の視点から、現代という時代に——とりわけこの困難な状況下で——ものを考える力を静かに奮い立たせてくれるはずである。

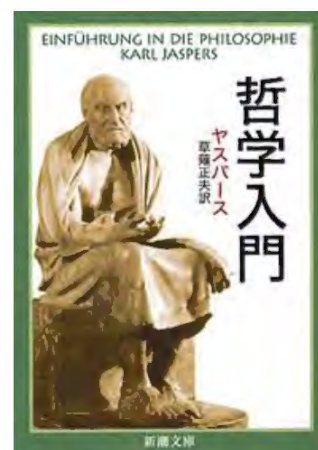
① [伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）『世界哲学史』（全8巻）](#) [ちくま新書、2020年](#)

「世界哲学」という新しい概念によって、従来の哲学の西洋中心性を乗り越えるばかりでなく、哲学という営為そのものの問い直しを試みるという野心的な企画。正直なところ私にはまだその射程は測りかねるが、しかし本企画において宗教学者が少なからぬ存在感を発揮しているように見えるのは興味深い。世界哲学という人文学の新たな挑戦と宗教学の邂逅はどのような知の地平を拓きうるか？ 当研究室から志田と渡辺のほか、複数の OBOG が寄稿している。



② [カール・ヤスパース『哲学入門』草薙正夫訳、新潮文庫、1954年](#)

上記「世界哲学史」の構想をいち早く打ち出したのはヤスパースであった。そのヤスパースは、洋の東西を問わず数多くの偉大な宗教思想家が輩出した紀元前 800 年～200 年頃を人類史上の一大画期とし、「軸の時代」と名付けた。彼は、およそ人間の生にとって不可避な条件である「限界状況」（死、苦悩、負い目、罪責など）を自らの哲学の起点としたが、これは宗教思想研究にとっても基本的に重要な洞察である。「人間にとって決定的なことは、挫折をどのように経験するかにかかっている」など、胸を打つ言葉も多い。



③ [村上陽一郎『ベスト大流行』岩波新書、1983年](#)

カミュやデフォーの小説などともに、再び脚光を浴びることになった古典的新書。私にとって忘れがたいのは、荒れ狂う死の災禍が静謐な信仰の深化を結果したという著者——自らもカトリック教徒である——の考察とその筆致の見事さである。「私には、一片のフラ・アンジェリコ (Fra Angelico, 1387-1455) の描く作品のなかに、黒死病の残した深い蔭を見ない人の想像力が疑われる。ほとんど稚拙とさえ言える一筆一筆にこめられたアンジェリコの祈りは、死の淵を見たヨーロッパの魂が、芸術的な美しさを超えた、ひたすらなる信仰の内面に立ち到る瞬間を、鮮烈にわれわれの前に示している」。



④ エティ・ヒレスム『エロスと神と収容所——エティの日記』朝日選書、1986年

駒場に通っていたころ、ホロコーストの極限状況を経験した人々の記録に関心を持ち、そこで問われる神や信仰の問題の鋭さに引き込まれるようにして、ヴィクトール・フランクル『夜と霧』やエリ・ヴィーゼル『夜』などを読み漁った時期があった。ここでは、1943年にアウシュヴィッツに収容されるまでの2年間、日常が暴力に蝕まれゆく苦難の渦中に綴られたエティの日記を挙げておく。リスク論で知られるドイツの社会理論家ウルリッヒ・ベックの現代宗教論『〈私〉だけの神——平和と暴力のはざまにある宗教』（鈴木直訳、岩波書店、2011年）のなかでも、エティの「神」が議論の出発点であり帰着点になっている。（残念ながら絶版のようだが、古本であれば比較的手に入りやすい。）



⑤ ウィリアム・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』上・下、榎井啓三郎訳、岩波文庫、1969-1970年

原著は1902年刊行。100年以上も前に書かれた宗教哲学、宗教心理学の古典だが、夏目漱石や西田幾多郎、鈴木大拙にも影響を与えたジェイムズ思想はなお古びてはいない。「人間性の研究」という副題をもつ本書を、狭い「宗教」研究の枠組みに押し込んでしまうとしたら勿体ない。心霊主義的形而上学（父の影響）と合理主義的科学とのあいだで葛藤し、自らも精神を病んだ経験をもつジェイムズが人間を捉える眼差しは深く、細やかである。「健全な心」と「病める魂」など、圧巻の20講から成る。（本年度の学部・院共同ゼミで講読。）



⑥ 加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』新潮社、2014年

昨年5月に逝去した文芸評論家の3・11論。福島原発事故が露わにした近代産業文明の限界を直視し、「永遠に続くのではない」人類が、それでもなおいかに生きていくべきかを正面から問い、有限性を肯定する新たな価値観を思考しようとする強靱な論考。ベック、見田宗介、フーコー、アガンベン、吉本隆明、三木成夫らが縦横に引かれるなか、とりわけ宗教学者の目を引くのはジョルジュ・バタイユのエコノミー論の再評価である。合わせてバタイユの異形の宗教論『宗教の理論』（湯浅博雄訳、ちくま学芸文庫、2002年）も勧めたい。



⑦ [マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、1989年](#)

16世紀西洋に登場したプロテスタンティズムは、「職業召命観」と「二重予定説」に駆動されて圧倒的な「現世内禁欲」の倫理を生み出し、人びとの生活の全面的な合理化（西洋的合理性の形成）を進め、結果的に近代資本主義の成立を促したことを論証した。今後どのような領域を専門とするのであれ、駒場にいるうちに一度は目を通しておきたい、人文社会学の must-read である。いわんや宗教学を志す者においてをや。バタイユの宗教論にしても、『プロ倫』を踏まえて読むのでなければ理解はおぼつかない。



※宗教学の読書案内としては、[島園進『宗教学の名著30』ちくま新書、2008年](#)（前掲・西村①）がまずはおすすめ。本研究室のOBである江川純一氏のブログもたいへん勉強になる。

[「本気で宗教学を学びたい人のための文献リスト第二版」](#)

宗教学の文献紹介

教員：[志田 雅宏](#)

これまで、いくつかの大学で一般教養科目として宗教学の講義を担当するなかで、私が受講生たちから学んだことのひとつは、「なぜ宗教を学ぶのか」という問題に対して、つねに自覚的でなければならないことである。他分野を専攻する学生、宗教を教養として学びたいと思っている学生、そしてこれから本格的に宗教を学ぼうという意志を持つ学生には、宗教についての学びを広く開いていき、自分自身の知的関心になんらかのかたちでつなげていってほしいと願っている。そのためにまず重要なことは、自分が暮らしている社会が宗教に対してどんなイメージおよび理解を持っているのかを自覚しておくことであると思う。この紹介では、自分の講義の主たるテーマとして取り上げてきた一神教世界を理解するための豊かな知見を提供してくれる文献と、現代において宗教と向きあう自覚をうながしてくれる文献を取り上げてみたい。

① [小原克博『一神教とは何か』平凡社新書、2018年](#)

国内の一神教文化研究を主導する同志社大学の CISMOR（一神教学際研究センター）に従事してきた著者による一神教の概説書。日本では一神教が得体の知れないものとして、しばしば単純化されたレッテルを貼られてきたことに対する問題意識が最初に示されている。自分の勝手なイメージを他者に投影する偏見には、深刻な暴力性が潜んでいる。一神教を学ぶことには、そうした社会的な、あるいは自分自身が無意識のうちに持っている偏見と闘う作法を養うことも含まれるのである。なお、CISMOR による一神教研究については、刊行物や講演動画など、[公式のウェブサイト](#)で幅広く公開されている。



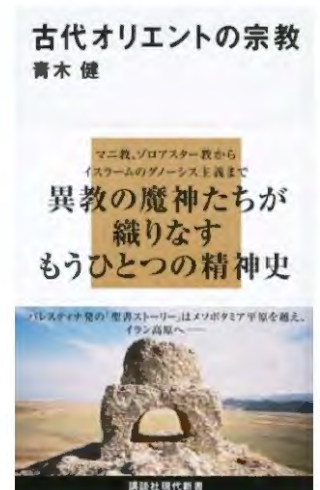
② [藤原聖子『教科書の中の宗教』岩波新書、2011年](#)、[藤原聖子『世界の教科書でよむ〈宗教〉』ちくまプリマー新書、2011年](#)

本校の宗教学研究室にて教鞭をとる著者が、日本の公立学校における宗教教育の根深い問題を指摘した書籍（前者）。異文化理解・多文化共生のために宗教を学ぶことの重要性は、これまで国連で何度も表明されてきたが、日本の小中高ではなかなかそれが浸透せず、著者自身も教科書の作成においてさまざまな障壁や苦勞に直面してきたことが記されている。私の担当講義で学生たちの声を実際に聞いてみても、宗教について本格的に学ぶ機会は、大学に入って宗教学の講義を取ったのが初めてであったという意見が非常に多く、本書で指摘されている課題を私も実感している。「〇〇教は愛の宗教」というような紋切り型の説明に終始せず、身近な場面から諸宗教の価値観や考え方を学び、学生たちがそれぞれ自分の意見を持ち、議論をするという教育の場を作っていくために、私もなんらかのかたちで貢献していきたい。なお、欧米やアジア、イスラーム圏など、海外のさまざまな教科書における宗教についての記述を紹介した後者も興味深い。



③ [青木健『古代オリエントの宗教』講談社現代新書、2012年](#)

ゾロアスター教研究の世界的な権威である著者による、古代世界の比較宗教史。さまざまな宗教が、かならずしも個々の境界線が明確でない仕方でき生きていた世界を、「聖書ストーリー」の受容という視座のもとでとらえ、その歴史的展開を壮大なスケールで描いている。ユダヤ教、キリスト教、イスラームという三つの一神教は、「アブラハム宗教」(Abrahamic religions) という用語で括られることもあるが、このアブラハム宗教の歴史と展開についての研究は、まだ日本ではほとんどおこなわれていない。古代から中世初期における中東の多様な宗教世界という文脈のなかで、巨大な一神教世界がどのように出現してきたのかを考えると、本書が刺激的な知見を与えてくれる。



④ [市川裕『ユダヤ人とユダヤ教』岩波新書、2019年](#)

本校の宗教学研究室で長く教鞭をとってきた、日本のユダヤ教研究の第一人者によるユダヤ教論。歴史、信仰、学問、社会という4章の構成で、狭い意味での「宗教」に限定されない「生き方そのもの」としてのユダヤ教を縦横に論じている。現在は残っていない長崎のユダヤ教礼拝所(シナゴグ)を訪れた斎藤茂吉が、ユダヤ新年のお祝いのために集まってきた当時のユダヤ人たちの礼拝を見て詠んだ歌など、ユニークなエピソードもちりばめられている。末部には日本の読者のための詳細な文献紹介もついている。



⑤ [菊地達也編『図説 イスラム教の歴史』河出書房新社、2017年、井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991年](#)

ユダヤ教、キリスト教、イスラームという三つの一神教のなかで、日本の読者向けに入門書を書くことの意義について最も自覚的なのはイスラーム研究者であると思う。井筒の入門書(後者)はまさにその嚆矢といえるが、近年の概説書で最も推薦したい書籍のひとつが、本校のイスラーム研究室で教鞭をとる著者の編集による前者である。豊富な写真と図により、イスラームの歴史と現在が多角的に紹介されており、その豊かな宗教文化を楽しんで読むことができる。また、イスラームを知ることについて、「他者」表象の観点から比較するのも面白い。現代日本のイスラーム理解(小村明子『日本のイスラーム』朝日新聞出版、2019年)と、中世西方キリスト教世界のイスラーム理解(R.W.サザン(鈴木利章訳)『ヨーロッパとイスラーム世界』ちくま学芸文庫、2020年)を比べると、それぞれの時代や地域の価値観が「イスラーム」という他者に投影されており、結果としてまったく異なるイスラーム像が描き出されていることに気づくだろう。



⑥ 伊藤邦武ほか編『世界哲学史』(全8巻) ちくま新書、2020年

筑摩書房による2020年の興味深いシリーズ。「世界哲学」をコンセプトとし、西洋の哲学を「哲学」と呼び、その他の哲学を「〇〇哲学」と呼ぶ、西洋中心的な視座を根本から揺るがすことをその目的としている。世界哲学を冠する近年のシンポジウムでは、日本や中国の思想研究者、芸術の研究者など、幅広い分野の研究者たちによる議論をおこない、さまざまな知見を市民社会と共有する試みがみられるが、そのなかで宗教学のはたす役割も小さくはなく、本シリーズにおいても宗教学の研究者が積極的にかかわっている。世界哲学はまだ黎明期にあり、その未来を見通すことは私自身にも到底できないが、宗教学およびユダヤ教研究に携わる者として、これからは提言を試みていきたい。

⑦ オットー (久松英二訳)『聖なるもの』、岩波文庫、2010年

20世紀前半には、後の宗教学の「古典」となる著作がいくつも書かれたが、ルードルフ・オットーの『聖なるもの』もそのひとつである。オットーは、宗教には本質的な根源としての「聖なるもの」が存在すると考え、その特徴をあらわすために「ヌミノーズ」という語を創り出した。「ヌミノーズ」を体験する人は、「戦慄すべき畏怖」の感情にとらわれるが、同時にその聖なるものに「魅せられる」というのである。言語化することのできない「ヌミノーズ」を、オットーはそれでも言葉を尽くして説明を試みる。宗教学の講義では、私はそのイメージを持ってもらうために、さしあたり「怖いもの見たさ」という表現から始めているが、はたしてどこまで「ヌミノーズ」に迫っているのか。それを吟味するには、やはりこの古典を注意深く読みなおす必要があるだろう。



⑧ スピノザ (畠中尚志訳)『神学・政治論』岩波文庫、1944年

ヘブライ語聖書(旧約聖書)はユダヤ教とキリスト教の教典として、日々の宗教実践から哲学・神秘主義の宗教思想まで、あらゆる営みの源泉であり続けてきた。17世紀のユダヤ人思想家スピノザは、こうした宗教伝統における聖書解釈が、聖書テキストの真理をそのテキストの外に置き、その真理の視座において聖書を読むことであったと批判し、テキストの真理はそこにあると主張して、あらゆる宗教的権威から聖書を解放し、自由に読むことの必要を訴えた。宗教伝統を意識的に対象化し、自分自身と距離を取って、それを批判的に検討するというスピノザの『神学・政治論』は、聖書の研究にかぎらず、宗教的なテキストを読もうとするすべての人にとって必読の書であるといえよう。なお、長らく読まれてきた畠中訳の他に、近年吉田量彦訳(光文社古典新訳文庫、2014年)も出版されており、新たな息吹に満ちた新訳を読んでみるのも面白いだろう。



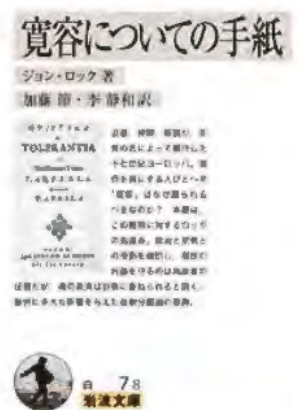
⑨ レッシング (篠田英雄訳)『賢人ナータン』(岩波文庫、1958年)

18世紀ドイツ啓蒙主義を代表する作家レッシングによる戯曲。検閲によって他宗派・他宗教の意見を封殺する当時のドイツ・プロテスタント社会を「ヨーロッパで最も奴隷的な国」と批判するレッシングが、宗教的寛容を訴えるべく執筆した作品である。劇の舞台は十字軍とイスラーム王朝の戦争により猖獗をきわめる中世のエルサレムであり、主人公のユダヤ人商人ナータンをはじめ、キリスト教世界とイスラーム世界の衝突に翻弄される人々が言葉をかわしていく。三つの一神教の平和的共存を願う「三つの指輪のたとえ話」など、本劇は宗教間の愛や家族の愛を主題とするものだが、自身の善良さを信じて疑わず、人の意見に耳を貸そうとしない当時のドイツ社会の姿を作中のある登場人物に投影させるなど、レッシングの冷徹な目が随所に隠れており、何度読みなおしても味わい深い。



⑩ ジョン・ロック (加藤節・李静和訳)『寛容についての手紙』(岩波文庫、2018年)、ヴォルテール (中川信訳)『寛容論』(2011年、中公文庫)

レッシング同様、17～18世紀のヨーロッパにおける代表的な寛容思想の作品。ロックの作品はオランダのプロテスタントに宛てた書簡、そのロックに啓発されたヴォルテールの作品は広く市民をその読者に想定したエッセイとして書かれた点も特徴的である。前述の『賢人ナータン』もそうだが、当時のヨーロッパにおける思想的課題としての「寛容」は、各国での宗教的な差別や迫害が激化する現実に応答するものであり、宗教のレベルでの寛容を実現することを目的としたものである。それに対しては、「宗教的に寛容であれば、人は他者とわかりあえるのか」「寛容の問題を宗教に限定するのは、視野の狭窄につながるのではないか」という批判もあってしかるべきだろう。寛容思想の古典を読みなおすことの現代的な意義があるとすれば、それは宗教的寛容をさらなる思考のためのひとつの突破口とすることである。そこには、宗教についての学びを、さらに広く開いていくという宗教学のあり方と通奏するものがあると思われる。



教務補佐：佐藤 清子

アメリカ合衆国の宗教について勉強しています。東大では教員ではありませんが、他校での授業の際など、アメリカ合衆国の宗教について話すときによく活用する書籍等をご紹介します。

① [山下範久編著『教養としての世界史の学び方』東洋経済新報社、2019年](#)

「教養としての」と銘打たれたとおり、読みやすく、なおかつ最新の歴史学的知見が反映された論文集。日本やアメリカといった国家の枠組み、家族や文学のような自明に見える概念を、当たり前で「ない」ものとしてみたとき、世界史は新たな姿で現れることがよくわかる。東大東洋文化研究所、中島隆博先生執筆の第13章「宗教的交通の豊かさ」は、「宗教」概念もまた、近代の産物であることを分かりやすく示す。



② [森本あんり『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮選書、2015年](#)

アメリカの宗教を学ぶおもしろみを存分に味わえる一冊。反知性主義を単に悪いものとしては描いておらず、「ハーバード主義をぶっとばせ」というエネルギーこそがアメリカに積極的な変化をもたらしてきたことを指摘する。反知性主義という言葉の生みの親、[リチャード・ホフスタッター『アメリカの反知性主義』\(みすず書房、2003年\)](#)も併せて読みたい。同著者によるアメリカキリスト教史の教科書『[キリスト教でたどるアメリカ史』\(角川ソフィア文庫、2019年\)](#)、新書本『[異端の時代——正統のかたちを求めて』\(岩波新書、2018年\)](#)もおすすめ。



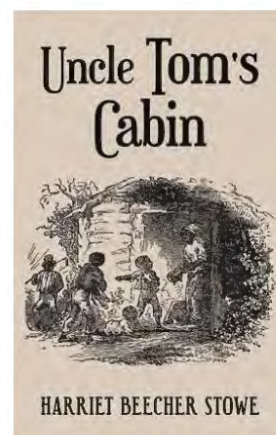
③ [アレクシ・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー』\(1835年、1840年\)](#)

アメリカに視察に訪れたフランス人トクヴィルによる古典的名著。邦訳は複数あるが、松本礼二訳(岩波文庫、2005年)をお勧めする。トクヴィルは宗教がアメリカの民主主義を支える重要な要素であるとして、現代でも色あせない分析を加えた。宗教についての記述だけでなく、デモクラシーが世界を席卷すると見越しつつ、その可能性に懐疑的でもあったトクヴィルの観察は今読み直しても改めて刺激的。



④ [ハリエット・ピーチャー・ストウ『アンクル・トムの小屋』\(1852年\)](#)

教科書に載っていたから知っている、という人は多いであろうこの作品、実際に読んだ方はどれぐらいいるだろうか。本作は19世紀に人気だった感傷＝「泣ける」小説の形式をとり、奴隷制批判を行った。作者ストウは、奴隷制を嫌悪してもその廃止のために動こうとはしない、社会の大部分を占める保守的なキリスト教徒の心を動かすツボを熟知し、様々な仕掛けを作中に施した。ストウの手のうちに乗って泣かされながら一度読み、仕掛けに注目しながら二度三度と読みたい。邦訳は[小林憲二訳](#)が手に取りやすいが高価なので、[パブリックドメインに入った原書](#)にも挑戦してほしい。

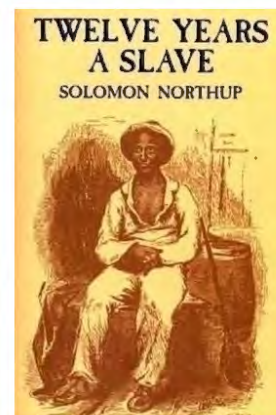


⑤ [『それでも夜は明ける』\(2013年\)](#)

映画。原題は *Twelve Years a Slave*。原作となったのは12年間の奴隷生活を送った実在の人物、ソロモン・ノーサップによる同名の半生記(1853年)。奴隷制下の日常を淡々と描くことでその恐ろしさを生々しく伝え、奴隷制とキリスト教の関わりにも目を向けている。暴力描写が含まれているので苦手な人は注意してほしい。

[原書は Google Books](#) で読むことができる。

また、映画公開にあわせて日本語訳も出版された。(『[12 イヤーズ・ア・スレーブ](#)』小岩雅美訳、花泉社、2014年)。



⑥ [『マルコム X』\(1994年\)](#)

映画。ブラック・ムスリム(アメリカ黒人の間で生まれたイスラーム系新宗教)の団体ネーション・オブ・イスラームの伝道師にして、公民権運動活動家であったマルコム X の生涯を描く。マルコム X に作家のアレックス・ヘイリーがインタビューして書かれた『[マルコム X 自伝](#)』(1965年)を原作とする。自伝は邦訳あり。映画の内容はほぼ事実に基づいており、マルコム X の演説もそのまま再現されている。ただし、一部脚色・創作が加えられており全てが史実とは言えないので注意すること。ブラック・ムスリムとマルコム X についての知識が得られることはもちろんだが、宗教による劇的な人格変容の一サンプルとしても興味深い。



⑦ [『ワイルド・ワイルド・カントリー』\(2018年\)](#)

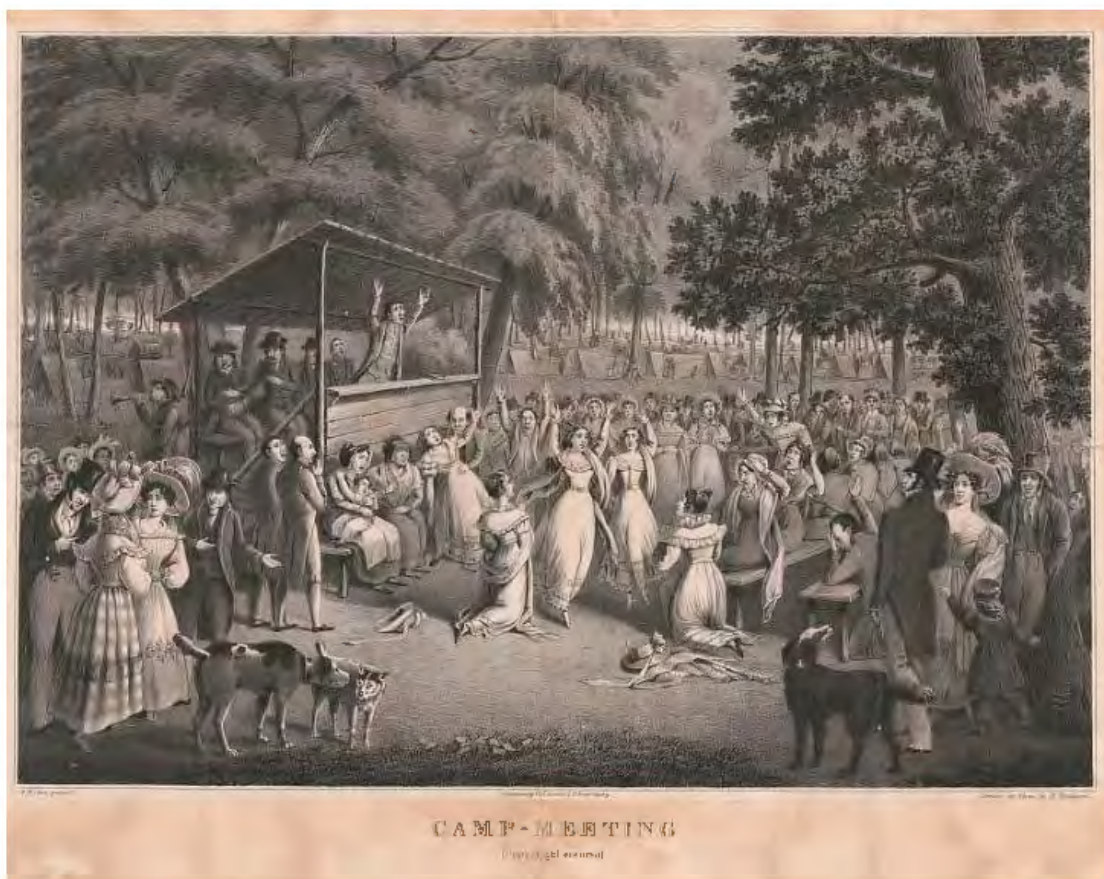
ドキュメンタリー作品。Netflix のオリジナルで他では見られない。1980年代のアメリカ合衆国に、インド人宗教者バグワン・シュリ・ラジニーシを中心としたコミュニンが建設された。作品は関係者インタビューや当時の TV 映像を材料に、コミュニン建設から付近住民との軋轢、教団が犯罪行為に手を染め、内紛と消滅に至る4年間(1981-1985)を扱う。いわゆるカルトについての作品であると同時に、アメリカについて多くを語る作品。全部見ると6時間以上かかるが、こうした機会にぜひ見てほしい。

⑧ [Religion & Public Life - Pew Research Center](#)

アメリカの宗教と社会についての統計を取っているシンクタンク、ピューリサーチセンターのウェブページ。統計データを美しいビジュアルイメージにして提供してくれるため、有用であり面白い。アメリカは政府が宗教統計を取らないので、[ピューリサーチセンターが行うアメリカ人についての大規模宗教統計（最新版は2015年発表）](#)は、近年のアメリカ宗教の実態を知るうえで貴重。

⑨ [アメリカ合衆国議会図書館](#)

多数の資料がオンライン化されており、しかも高画質。絵画や写真などのビジュアルイメージも多数利用できる。



* 1829 年に出版されたキャンプ・ミーティング（野外宗教集会）の画像
(<https://www.loc.gov/item/96510018/>)

⑩ オンラインでの博物館・テーマパークめぐり

[創造説博物館ウェブサイト](#)

アメリカ合衆国のキリスト教徒のうち、世界の起源は聖書に書いてあるとおり（＝創造説）が正しいと考えている人々が多い。アメリカには多数の科学博物館があるが、創造説を「科学的に」提示するための創造説博物館も複数存在する。上記は中でも最も有名なオハイオ州の博物館のウェブサイト。バーチャルツアーなど充実した内容で、遠隔からでも展示内容をある程度知ることができる。

[姉妹施設のアーク・エンカウンター（実物大ノアの箱舟テーマパーク）](#)もある。

アメリカにいながら聖地エルサレムを体感できるテーマパーク、[ホーリー・ランド・エクスペリエンス](#)も、ウェブサイトが美しく充実している。

なお、ホーリー・ランド・エクスペリエンスはフロリダのディズニー・ワールドのすぐ側にある。テーマパークと宗教について考える第一歩として[能登路雅子『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990年）](#)を挙げておく。

学生時代を回顧しながら

教員：[藤原 聖子](#)（本年度研究室主任）

自分の学生の時といっても既に博士課程の院生だったが、日本の社会を、また宗教学を大きく揺るがす事件が起きた。オウム真理教の地下鉄サリン事件である。バブル崩壊、阪神・淡路大震災が重なり、時代が大きく変わるという意識が社会に広がる中、宗教とは何なのか、宗教学とは何なのかという問いを突き付けられた。

① [藤原聖子「鏡」と「擁護」 — オウム真理教事件によって宗教学はいかに変わったか](#) 『東京大学宗教学年報』(13), 1995（オープンアクセス）

ということで、最初から手前味噌で恐縮だが、その時にその問いに答える形で、日本の宗教学者の対応を記録した論文である。ここで示した宗教に対する研究の三類型は、最近ではIS（イスラム国）が問題化したときにも見られた。論文では事件を受けて「文化批判型」が“自粛”していくことを懸念しているが、一つ付け加えるなら、「啓蒙型」にせよ「文化批判型」にせよ、啓蒙することや自文化を批判することを落としどころにした、紋切り型の論文が宗教学に限らず多いというのも学生の時に気になったものである。

『東京大学宗教学年報』は研究室の紀要で、全論文に東大のレポジトリからアクセスできる。

② [吉本隆明『共同幻想論』角川ソフィア文庫](#)（初版は[河出書房新社 1968年](#)）

吉本隆明はその前の時代から売れていた思想家の一人だが、実は学生の頃は私は食指が動かなかった。有名だった『共同幻想論』も国家論であり、その時の自分の研究にはあまり関係がないと思っていた。しかし今見てみると、この本は丸ごと宗教学の本だと言いたくなるくらい、宗教学的題材やトピックに溢れている。当時はそのような題材やトピックが取り上げられることが分野を問わず多かったので、ことさらに「宗教学的だ」とは思わなかったのだが、2020年代の学生の皆さんは本書をどう読むのか、知りたいと思う。なお、吉本はその後、オウム真理教を擁護したということで批判を受けた。なぜ宗教を共同幻想とみなす人がオウムを擁護したのかという問題も考えてみると、宗教とは何かという問いにより鋭く迫れそうだ。



③ [池澤優・藤原聖子・堀江宗正・西村明「シリーズ いま宗教に向きあう」全4巻、岩波書店、2018年](#)

オウム真理教は宗教史の流れや現在の社会状況の中でどのように位置づけられるのか。昔ながらの宗教とどう異なり、また社会的背景としては何があるのか。そのような問いに答えるのが、“現代宗教研究・入門”的なこのシリーズである。単行本のため1冊約2500円、揃えると1万円だが、多数のOBOGの協力を得て本研究室のスタッフが編集している（[死生学・応用倫理センター](#)の堀江先生も宗教学OB）。見取り図を示す序論の後、具体的な事例分析（モノグラフ）である各章が続き、間には特定のトピックについての論争の流れや布置を概観する論点整理的な「争点」が組み込まれている。各巻のタイトルは以下のとおり。

[『現代日本の宗教事情〈国内編Ⅰ〉』](#) [『隠される宗教、顕れる宗教〈国内編Ⅱ〉』](#) [『世俗化後のグローバル宗教事情〈世界編Ⅰ〉』](#) [『政治化する宗教、宗教化する政治〈世界編Ⅱ〉』](#)



④ [エミール・デュルケーム『宗教生活の基本形態』上・下（山崎亮訳）ちくま学芸文庫](#)

③で現在の状況を知るとともに、古典にじっくり向きあうことも学生時代の勉強の醍醐味。やはりウェーバーの『プロ倫』（前掲・渡辺⑦）やデュルケームの『基本（原初）形態』（できれば『自殺論』も）は、宗教学でも問答無用の必読文献。宗教の定義をするかしないか、先行仮説を吟味しながらどう自分の方法論を提示していくか、研究手法についても学べる。



⑤ [山口昌男『アフリカの神話的世界』岩波新書、1971年](#)

本研究室の他の教員からは、アフリカ関係の推薦がないようなので、この1冊。やはり私が学生の頃に人気があった山口昌男の処女作である。構造主義って何だ？と思った時も、この本は助けになるだろう。



⑥ [『現代思想 総特集=仏教を考える』2018年10月臨時増刊号](#)

仏教関係がまだ出ていないことにも気づいたので、最近急速に研究が進んだ「近代仏教研究」の動向を押さえている雑誌を1つ紹介したい。インド哲学仏教学の教員による寄稿もあるが、「討議」参加者4名のうち3名は宗教学会の中心的論客。インド哲学仏教学専修課程と宗教学専修課程での、仏教に対するアプローチの違いも何となくわかるかもしれない。



⑦ [『コーラン まんがで読破』](#) イースト・プレス、2015年

『クルアーン (コーラン)』は、宗教について学ぶのであれば一度は読みたいと思っても、物語調ではないので今一つ読み進めにくいかもしれない。私が学生の時は、イスラム学専修課程の授業で、[井筒俊彦『「コーラン」を読む』](#)を薦められた。それも現在は文庫 (岩波現代文庫) で手に入るが、もっと気軽にお手頃に、ということなら、マンガという媒体がある。信仰のある人による出版ではないため、信者やイスラム学の先生には受け入れられないかもしれないが、いやどうして、これがなかなか馬鹿にならないしあがりて、マンガという表現方法の威力を改めて感じる。同じようにイスラムの起こりを描いた[映画『ザ・メッセージ』](#) (米、1976年) と比較してみるとさらに気づくことがあるかもしれない。



⑧ [ジョージ・マクドナルド『北風のうしろの国』](#) 早川書房

子どもの頃に読んだファンタジー作品には、宗教学や死生学の観点から見ると新しい発見が生まれるものが多いはず。どうやって? については研究室 OG 大澤千恵子先生の[『見えない世界の物語 超越性とファンタジー』](#)『〈児童文学ファンタジー〉の星図 アンデルセンと宮澤賢治』が道案内役になるが、作品では、スコットランドの牧師だったマクドナルドのこの名作をお薦めしたい。『指輪物語』や『ナルニア国』に先行する、初期ファンタジーを代表する作品 (初版 1871年)。主人公のマクドナルド少年は、「北風」に連れられ、屋根裏部屋から飛び出し、ロンドンの上空をとこ狭しと飛行する。北風の国とは天国なのかそうではないのか。巣ごもり中に読むにはぴったり。



1909年版だが原著は[こちら](#)から。

⑨ [高橋秀実『素晴らしきラジオ体操』](#) 草思社文庫、2013年

緊急事態宣言発令後、私は自宅で毎朝 YouTube ラジオ体操を続けている。この本に影響されて……というとアブない人だと思われそうだが、本書は、なぜラジオ体操は日本人に愛されているのかを解明したもので、たいへん面白く読んだ。著者はライターだが、3年間にわたり各地のラジオ体操会場で行ったインタビュー調査がもとになっており、自由な外出が可能になったらフィールドワークをしてみたいという人にも参考になる。宗教史との接点は近代神道史である。関連する論文に、中房敏朗「[1920年代から1930年代における「日本体操\(やまどばたらき\)」の展開過程について](#)」2016。



⑩ [Religious Studies Project](#)

イギリス宗教学会の若手が立ち上げた、主として社会科学系の宗教学の動向を追うサイト。宗教学を牽引する各国の研究者にインタビューをしたポッドキャストが中心だが、音声データだけでなく、その文字起こし原稿も掲載されている。いま、宗教に関してどのような研究がどのような関心のもとになされているのか、ざっと見るだけでもワクワクしてくる。